

平成29年5月吉日

関係各位

第5回全国介護・終末期リハ・ケア研究会研究大会

大会長 鈴木 孝治



趣意書

この度、第5回全国介護・終末期リハ・ケア研究会研究大会の大会長を仰せつかりました鈴木孝治です。研究大会を開催するにあたりご挨拶申し上げます。

「介護期・終末期のリハビリテーション」とは一体どのようなことをするのでしょうか？

その概念を提唱された茨城県立健康プラザ管理者の大田仁史先生は、死に至るプロセスを身体機能で見る評価やご遺体の姿を基に減点法で点数化する評価方法を提唱されています。また地域包括ケアシステムにおいても、「自分らしい暮らしを人生の最期まで続ける」と定義されています。介護期・終末期のリハビリテーションおよびケアは「維持」もしくは「右肩下がり」へのアプローチであり、「右肩上がり」を目標としている急性期・回復期のリハビリテーションおよびケアとは対極に位置しているという特徴を有しております。このため、現時点では、このような概念を実証している研究はまだ少なく、今後の取り組みが期待されております。

全国介護・終末期リハ・ケア研究会は、平成25年9月に設立記念の研究大会を開催いたしました。そして翌年の平成26年7月には、「平成26年度全国地域リハビリテーション合同研修会 in あいち」の事務局を当研究会が担当し、第2回の研究大会を共催させていただきました。第1回、第2回ともに研究会会長の澤俊二が大会長を務めさせていただきました。さらに Web サイト (<http://n-cerc.org/>) を立ち上げ、当研究会の取り組みについて情報発信する体制を整えました。第3回研究大会は壺岐英正大会長のもと、「芯から支えるリハ・ケアを目指して」というテーマで開催させていただきました。第3回まではすべて愛知で開催しておりましたが、昨年の第4回大会では開催地を東京に移し、福田卓民大会長により、「終をみすえて～終末期に対応するリハビリテーションとケア～」というテーマでエンド・オブ・ライフケアについて活発な議論がなされました。

そこで第5回の研究大会は再び開催地を愛知に戻し、最期およびその後の家族への途絶えることのない支援を議論してゆこうと考え、「介護・終末期リハ・ケアのたゆまぬ実践～支え支えられ～」というテーマを掲げました。当日の講師には、国際医療福祉大学大学院医療福祉経営専攻先進的ケア・ネットワーク開発研究分野教授の竹内孝仁先生をお迎えし、前夜のセミナーでは、重度認知症者が電車事故にあわれたご家族からの講演も企画しております。竹内先生は、介護予防・自立支援パワーリハビリテーション研究会の会長で、日本自立支援介護学会の学会長でもあられます。リハビリテーション専門医のみならず、介護現場での科学性を追求する研究を精力的に進められております。

介護期・終末期のリハビリテーションおよびケアに関わるすべての方々のご参加をお待ちしております。当研究会発祥の地、愛知で皆様にお会いできること楽しみにしております。

藤田保健衛生大学医療科学部リハビリテーション学科 教授

作業療法士 鈴木 孝治